

飲酒運転撲滅は企業の使命 検知器は適正に使うことが重要

国や運輸業界からの強い要請を受け、アルコール検知器の製造・販売に携わる企業により2015年、「アルコール検知器協議会」は発足した。飲酒運転による事故をなくすために大きな役割を担うアルコール検知器だが、どれを選ぶべきか迷ったときに、同協議会の認定を受けているかどうかは重要な基準になる。



アルコール検知器協議会
副会長 酒井 規光さん

大学卒業後1991年に中央自動車工業株式会社に入社。自動車部品・用品販売事業に携わり国内外で活動。同社取締役統括部長 兼 広州セントラル代表取締役（現職）。2002年よりアルコール検知器事業を展開し、飲酒運転根絶を目指して活動している。

厳格な認定制度を受けた 信頼できる機器を選ぶ

延期されていた、アルコール検知器を用いた酒気帯び確認の義務化が、2023年12月から開始される目算となっている。事業所ごとに備えられたアルコール検知器が必要になるわけだが、企業が新しく検知器の導入を検討する場合、どのような基準で製品を選ぶべきだろうか。まずは市場に出ている検知器の種類について、アルコール検知器協議会の副会長である酒井規光さんに尋ねた。

アルコール検知器は、「使用場所」「センサー方式」「使用方法」の項目において、それぞれ大きく2つの種類に分けられる。

■使用場所

遠隔管理ができるポータブルなハンディ型と、事業所などで使う据え置き型が代表的だ。据え置き型はハンディ型に比べて小型化に縛られないため、免許証リーダーを備えるなどシステムの付加価値が高くなる傾向にあるという。

■センサー方式

半導体式か電気化学式かで原理が異なり、前者は比較的成本は安いアルコール以外の類似ガスの影響を受けやすい。一方、後者はアルコール検知の精度は高いが、その分コストが高くなる傾向にある。

■使用方法

機器に向かって息を吹きかけるオープンブローとストローやマウスピースを使うタイプに分かれる。オープンブローは周囲の環境を受けやすく、たとえば消臭スプレーなどのエタノールに反応することがあるため、ストロー・マウスピースタイプの方がより正確に測定できる。

このように検知器の種類にはそれぞれにメリット・デメリットがあり、コストや事業所の環境、社有車の管理状況などにより自社に合うものを選ぶといいのだが、大切なのはきちんと機能する製品を導入することだ。判断基準として、アルコール検知器協議会による「アルコール検知器認定制度」を受けていることが前提になるだろう。

「アルコール検知器認定制度は、書類審査のほか、外部機関による現地調査・試験実施という客観的な監査プロセスを経て、全ての要件を満たした機器を認定します。審査の項目は、取扱説明書の適正な記載内容、機器の精度、工場での品質管理など多岐にわたり、いずれにおいても厳格な審査が行われます」

機器の技術や品質の向上は、同協議会が設立されたときからの使命だ。

定期メンテナンスを怠らず 正しく測ってこそ意味がある

2011年の法改正で、緑ナンバー（事業用車両）を対象に義務化されたアルコールチェックだが、その後アルコール検知器で正常な計測ができていないケー



認定番号
JB10001-00

アルコール検知器協議会に認定された機器には「JBマーク」が付与される

スが散見され、製品の信頼性が問題となった。2015年にアルコール検知器協議会が発足したときは、ガイドラインが早急に必要だったのだ。酒井さんたちは公平かつ精度の高い「アルコール検知器認定制度」を策定したが、協議会の本質は飲酒運転の根絶にある。アルコール検知器を飲酒運転防止に役立てるには、ハードの品質が優れていることと同時に、「正しく」使われなければ意味がない。だからこそ、認定制度の審査は取扱説明書の記載にまで及んでいるのだ。

「アルコール検知器が反応するのは酒類だけではないことを、理解していない方がけっこういらっしゃるんです。アルコール消毒液やパンなどの食事、歯磨き粉にもアルコールが含まれることがあり、それらに反応することは誤作動ではないのです。正しい数値を測るためには、計測の15分ほど前に水で口をすすぎ、飲食やたばこを控えた上で行うのが望ましく、そうした使い方についても取扱説明書に明記されていることが認定の条件になります」

常時有効性保持も、正しく使うための大切な要素だ。検知器は設置したあと、常に正しく使える状態が保たれていなく

図表 アルコール検知器の種類

使用場所	向いている企業	特徴
ポータブル(ハンディ型)	・直行直帰や出張が多い ・感染症対策などで機器を共有したくない	・持ち運びがしやすい ・据え置きタイプより安価
事務所(据え置き型)	・対面でアルコールチェックを行いたい ・免許証リーダーなどの機能を付加したい	・持ち運びがしにくい ・ポータブルより高額 ・他の機能を付加しやすい

センサー方式	使用方法	特徴
半導体式	ガスセンサーの反応部に吸着している酸素とアルコールが反応することで生じる電流変化を利用	・比較的安価 ・短時間で測定可能 ・小型で持ち運びがしやすい ・センサーの耐久性がやや低い ・アルコール以外の成分にも反応する可能性がある ・周囲の環境の影響を受けやすい
電気化学式	電極内部で起こる酸化還元反応を利用	・検知精度が高い ・センサーの耐久性が高い ・外部の影響を受けにくい ・比較的高価 ・測定に時間がかかる ・大型で持ち運びがしにくい

使用方法		特徴
オープンブロー	機器本体の吹き込み口に息を吹きかける	・測定が容易 ・周囲の影響を受けやすい
ストロー	機器にストローを差し込んで息を吹き込む	・検知精度が高い ・ストロー(市販品)が必要
マウスピース	機器に専用マウスピースを付け、息を吹き込む	・検知精度が高い ・専用のマウスピースが必要

ればならない。酒井さんは、検知器を選択する際のポイントとして、メーカーの姿勢を挙げている。

「確認すべきはアフターフォローの有無ですね。売って終わりではなく、知見が豊富で運用面のアドバイスができるメーカーを選んでいただきたいと思います。アルコール検知器のセンサーには使用期限があり、定期的に交換しなければならないものです。機器自体の品質やコストに加え、メンテナンスのサービスや問い合わせ窓口の使いやすさなども、ぜひ考慮してみてください」

導入する側の企業が、検知器の導入を機に、飲酒運転の根絶に本気で取り組

んでくれることを酒井さんは願っている。

「点呼の不正ができてしまう手書きから、管理が確実でドライバーの手間も省けるデジタル化を目指していただくのも、その一つです。デジタルでデータを瞬時に共有できれば検査忘れも防げますし、各種メンテナンスの管理も楽になるでしょう。われわれも、認定制度の内容を常にブラッシュアップして精度を向上させていくと同時に、官民で連携しつつイベントや展示会を開催し、飲酒運転根絶に向けた啓発活動を続けていきます」

安全への取り組みには、自社のコンプライアンスが反映される。アルコール検知器は慎重に選びたい。